

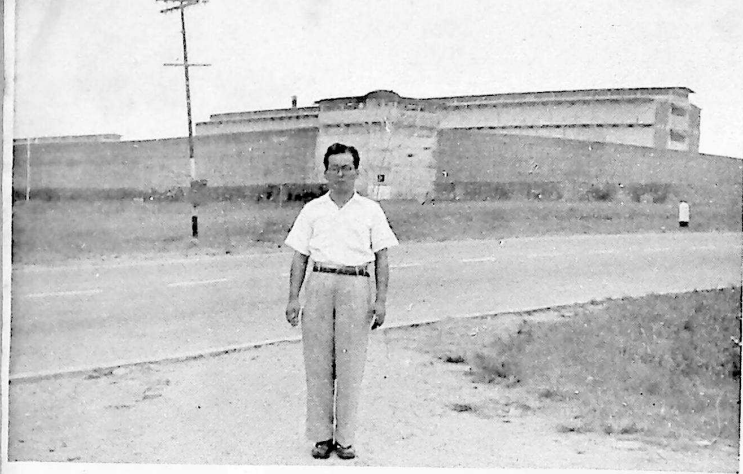


独立運動に身を捧げた島小太郎の墓

碑 文

メラティの花の散るごとく
戦没した祖国の英雄
ラトナ
ダイヤのごとく光り輝く
1948年2月23日没
月曜日

(注) メラティの花は日本の
武士を桜にたとえたる
と同じ



チャンギ刑務所前に立つ著者



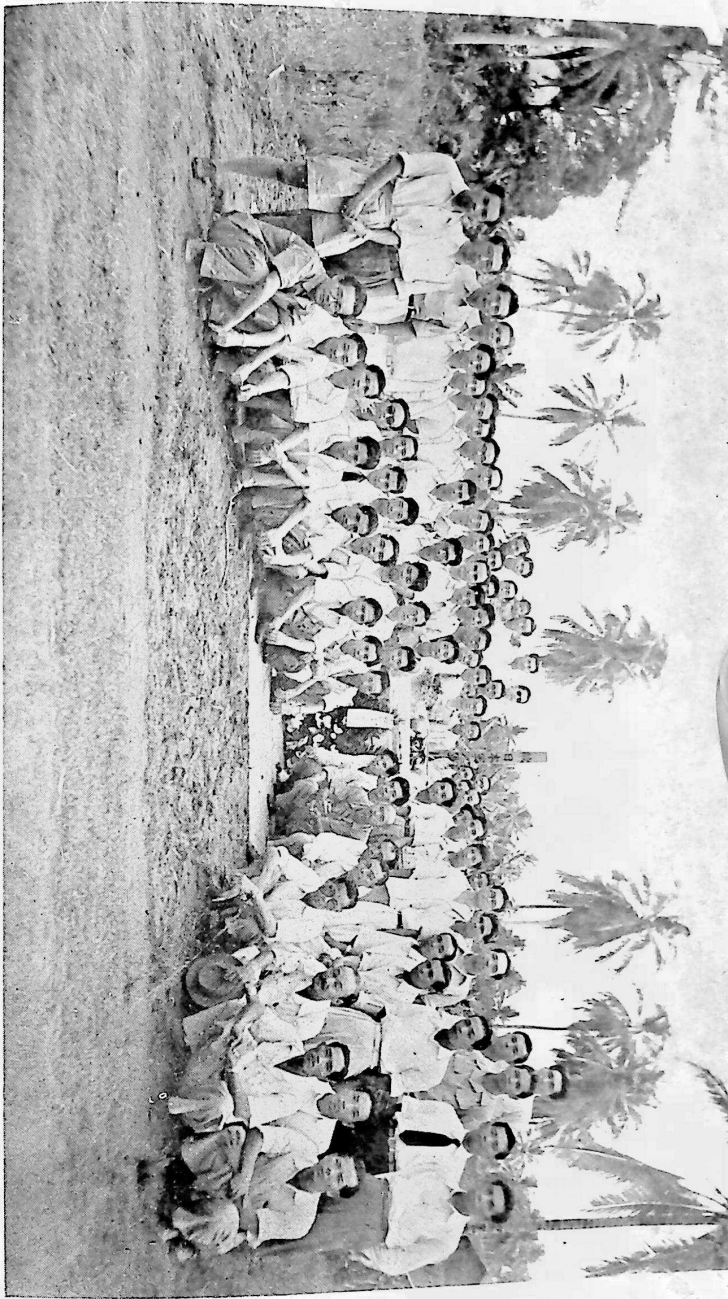
独立運動で戦死したメラティの花に埋まる日本人の墓



独立運動に参加戦死した日本人のための軍隊葬



戦犯で処刑された田辺盛武中將の墓



独立達成後現在インドネシアに残留している日本人

目次

大爆発の夜……………	3
日本のマタ・ハリ……………	18
歴史の一頁……………	32
叛乱軍の烙印……………	46
メダン本部壊滅……………	66
狂える「娘部隊」……………	91
割礼異聞……………	105
インドネシア義勇軍起つ……………	121
ワナにかかる……………	139
鳥小屋の微笑……………	166
英雄・島小太郎……………	198
壮烈日本人部隊……………	225
脱出の日……………	246
ジャングルの牢獄……………	268
ふるさとの土……………	290
あとがき……………	295

人の志士や軍当局に頼まれたのではない。日本人としてやむにやまれぬ気持から、彼らの独立運動に参加し、その微力を援助したにすぎない。だが、今や南方のジャワ、スマトラには、長い間の白人の桎梏から解放された、自由のインドネシア民族が誕生したのだ。

——インドネシア万歳。

私は何度心の中で叫んだことであろう。

そのうちに、私の旧部下達の動静もわかってくる。私の亀の子たわし行商も軌道に乗って、卸売りを始めるところまでこぎつけた。私は旧部下達の展開後の行動記録をあつめて、それを編集し、かくれたる英雄達の金字塔をうちたてることを思いついた。この一書が、すなわち彼らの生きた歴史なのだ。

いくたびか、まっ黒い絶望の雲におおわれた私にも、今は太陽が暖かくほほえみかけている。私は生きていくのだ。だが私がこうして生きるためには、沢山の犠牲があった。それは生命の犠牲というよりも、言葉は変だが、その人達の好意による行動に、有形無形の損害をかけたといういいである。私はそれらの人達に感謝し、いま白目のもとに自由になった自分を、むちうちあげまし、後半生を世間に奉仕する人間として暮してゆきたいと念願している。

(完)

あとがき

特務機関というのはスパイの別名である。私はその特務機関に十年間、自分のいのちと青春を投げこんだ。

最後の三年間はマライ作戦に従い、さらに占領後の軍政の一翼として謀略宣伝活動を行い、ことに対マライ共産党対策では、茨木特務機関の名が彼らに呪符のように恐れられるほど効果をあげた。私とそのままで内地へ帰っていたら、今ごろは戦犯として処刑されていたかも知れない。

しかし私は考えるところがあつて、機関員から選抜した同志二百名の精鋭と共にスマトラに脱出して、インドネシア独立運動に参加した。この中には六名の女性もふくまれていた。

日本の軍部は大平洋戦争を聖戦と称し、アジアの解放をその旗じるしとした。私の機関の仕事の一つに、対インドネシア工作の一班があつて、私達はインドネシアとの和協のために「独立」という名の甘い果実を与えていた。だが日本軍は敗れた。日本の軍部は独立の約束の責任をとうとうと失った。理由は戦争に負けたからだといふのである。

それでよいのか——私は日本人の誇りにかけて約束を守りたかつた。そればかりではない。私達に協力した彼らへのつぐないとしても、彼らの独立運動に援助をせねば、日本人の信用は永遠にアジア民族から失われるだらうと思つた。

私に考えがあつて、同志二百名と共にシンガポールを脱出したのはそのためであつた。
独立——独立——。

その叫びは、終戦後もないスマトラの一角で雄々しく叫ばれたかと思うと、たちまち燎原の火のごとく全島を席卷した。青年達は西部劇よろしく、腰にはだかのピストルをぶらさげて、日本軍が遺棄した武器をとって立ち上がった。その火つけ役をしたのは、全島十数カ所に潜在したわれわれであつた。機関員達は回教徒のシンボルである割礼までして彼ら民族にとけこみ、あるいは現地人女性と結婚して彼らと共に戦つた。

独立には血を流さなければならぬ。悲壮なる民族の血のたたかい。相手は優秀な装備をほこる英蘭軍である。それに対して独立軍は日本軍の遺棄した、あるいは奪つた旧式の兵器で、大砲も戦車もなかつた。いや、ないといつてもよいほどの微々たるものであつた。したがつて、犠牲の血は大きく、われわれ日本人の血もからくれないにスマトラの土を染めたのであつた。

このようなわれわれを、旧日本軍当局は叛乱軍の汚名をきせた。そして私はだましようちにあつて捕われ、チャンギ刑務所へ送られた。

だが私は、その死の牢獄を脱走してマライのジャングルにのがれた。

これが私達のスマトラ島展開の行状である。その後私は、シンガポール華僑の好意によつて日本へ潜行密帰したが、内地へ帰つておどろいたことは、例の戦犯裁判の影響もあるのだろうが、比島バタインの死の行進、シンガポールの大量虐殺、あるいは捕虜収容所の虐待といつたような日本軍の旧

悪暴露だけが表面に浮び上がつて、古来仁侠の民族として愛と勇氣に富んだ日本人の本質的なよさというものが、ことさらに抹殺されていることであつた。

私は「メラティの花のごとく」散つた、スマトラの同志のことを思いだして心が暗くなつた。私の同志達は、旧日本軍部の悪徳の尻ぬぐいをして、欲得からいえば一文の金にもならない他国の独立戦争をたたかい、その尊い血をながしたのである。みんな若い青年将校ばかりであつたが、それは純真な犠牲心の発露であつて、「自分達がせねば、だれがするのだ」という祖国日本を思う愛国心の発露でもあつた。

私は思つた。このままでは好戦的日本人のレッテルをはられて、私達の行動はふたたび汚名をきせられるのではないかと……。それでは異郷に散つた同志の霊がうかばれない。私は文章につたないが勇を決してペンをとつた。日本に帰つて資料も十分ではなかつたが、一字一句に、私は、彼らの霊をなぐさめるつもりで書いた。

本書によつて、われわれの真意がわかつてもらえれば幸いである。

昭和二十八年十月

東京にて

茨木 誠 一